暮らしの視点(4)

「～活」の広がりを考える

― 新たな言葉の意味するところ ―

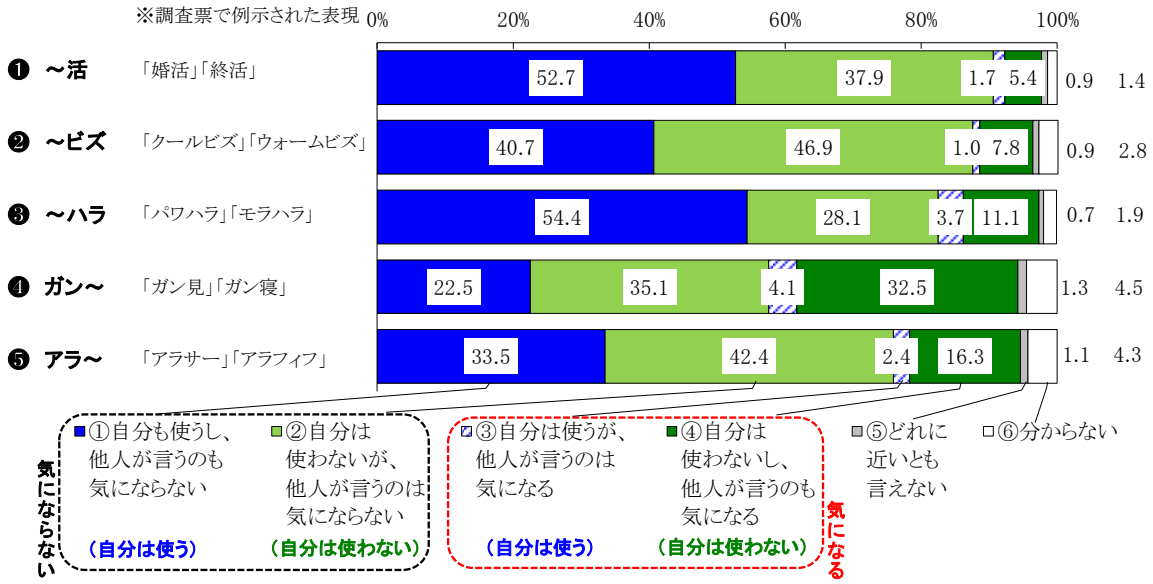
主任研究員　北村　安樹子

<「～活」「～ビズ」 ― 9割前後が「気にならない」>

文化庁が定期的に行っている「国語に関する世論調査」では、近年使われるようになった新しい言葉や表現等に関する人々の意識を調査している。直近の調査では、❶「～活」、❷「～ビズ」、❸「～ハラ」、❹「ガン～」、❺「アラ～」という５つの表現を取り上げて、それらの使用状況や他人が用いることへの意識をたずねている。

調査結果をみると、調査票で「婚活」や「終活」などの使用例が示されている❶「～活」という表現については、「①自分も使うし、他人が言うのも気にならない」と答えた人が52.7％と、「②自分は使わないが、他人が言うのは気にならない」（37.9％）を合わせた９割以上が、他人が言うのを聞いた場合に「気にならない」と答えている（図表１）。この割合は、調査で取り上げられた５つの表現のなかで最も高く、❷「～ビズ」とともに、回答者の大半が「気にならない」と答えていることになる。

図表１　新しい表現に対する印象（全体）



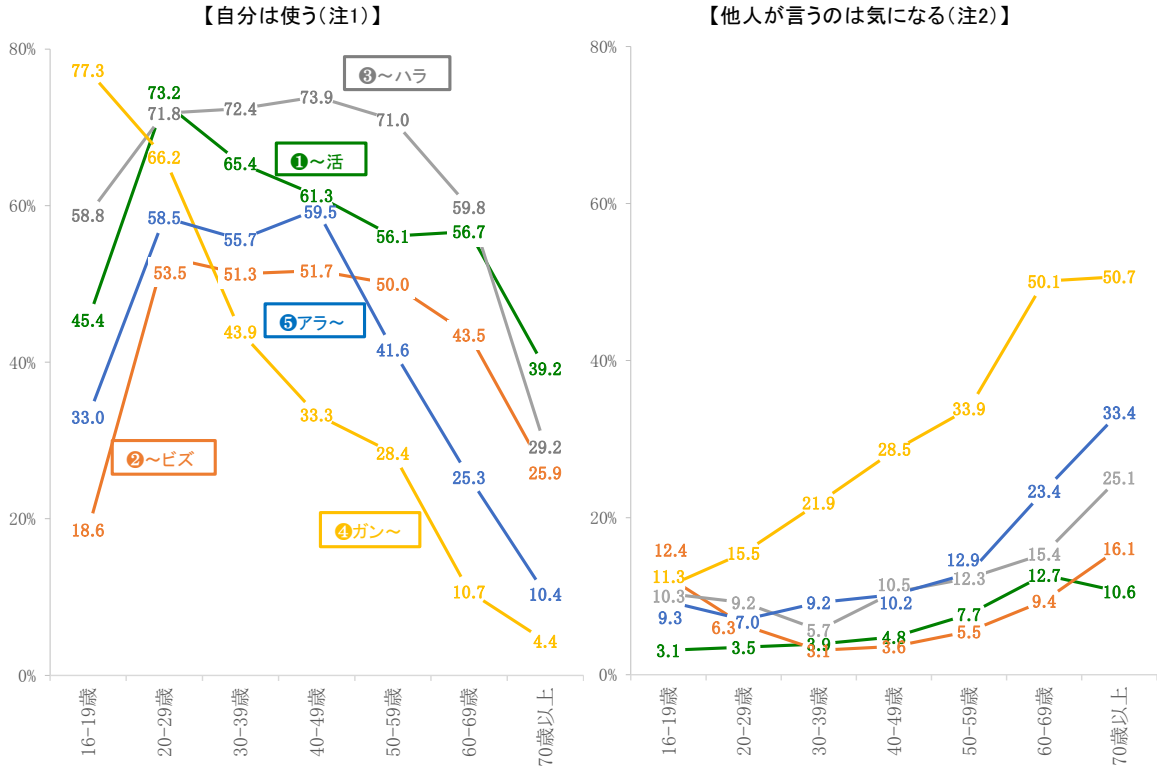
資料：文化庁「令和元年度　国語に関する世論調査」より作成。
注　：調査対象者は全国の16歳以上の男女3,000人。①は「自分も使う（または、使うことがあると思う）し、他人が言うのも気にならない」、③は「自分は使う（または、使うことがあると思う）が、他人が言うのは気になる」の略。調査票では、それぞれの表現について❶～活（「婚活」や「終活」などとして用いられる）等の形で使用例を示している。

＜使う人が少なく、気になる人が多い「ガン～」＞

一方、図表２は先の回答について、「自分は使う」と答えた人、「他人が言うのは気になる」と答えた人の合計割合を、それぞれ年代別に示したものである。これをみると、❶「～活」については、いわゆる「就活」の経験を経て社会人となる人が増える20代において「自分は使う」とした人の割合が73.2％と最も高く、60代までは６～７割前後を占めるのに対し、70代以上では４割弱と低い水準にとどまっている。これと同じように、20代から60代で「自分が使う」と答えた人が多い傾向は、❸「～ハラ」や❷「～ビズ」にも共通する。これらの表現は、社会人として働く人の多い世代で使う人が多くなっている点が共通している。

これに対して、使用例として「ガン見」や「ガン寝」といった使い方が示されている❹「ガン～」という表現は、10代では８割弱が「自分は使う」と答えているが、30代以上では半数を下回り、使わない人の方が多数派になる。❹「ガン～」に関しては、他の表現に比べて語感が強く、「他人が言うのは気になる」とした人の割合も高いこと等から、30代以上では使わない人が多いと考えられる。

図表２　新しい表現の使用状況（年代別）



資料：図表１に同じ

注１：「自分は使う」は、図表１の「①自分も使う（または、使うことがあると思う）し、他人が言うのも気にならない」「③自分は使う（または、使うことがあると思う）が、他人が言うのは気になる」の合計。

注２：「他人が言うのは気になる」は、「③自分は使う（または、使うことがあると思う）が、他人は言うのは気になる」「④自分は使わないし、他人が言うのも気になる」の合計。

＜「～活」の広がりが意味するもの＞

今回の調査で取り上げられた表現のうち、いわゆる❶「～活」は、調査で例示された「婚活（結婚のための活動）」や「終活（高齢期や老後への備えに関する活動）」にとどまらず、キャリアデザインや健康づくりなど多様な領域において利用が広がっている。多くの人が当事者として経験する「就活（就職や再就職、離転職のための活動）」のほか、「朝活・夕活（朝夕の時間の有効活用）」、「妊活（妊娠に向けた活動）」や「保活（保育園等への入園のための活動）」、「認活（認知症予防や介護予防のための活動）」といった表現を見聞きした経験がある人もいるだろう。

これらの「～活」には、新たな言葉が生み出される前からおこなっていて、後から振り返ってみると新たな言葉に該当するものもあれば、言葉の出現や社会環境の変化等がきっかけになって、あらためて意識的・主体的におこなわれるようになるものもある。「～活」という言葉が幅広い人々に受け入れられている背景には、多様なライフイベントやライフステージについて意識的・主体的に考えることの重要性を感じる人や、それらをよりよい形で迎えるための備えや準備をおこないたいと考える人が増えたこともあるのではないだろうか。

（ライフデザイン研究部　きたむら　あきこ）